

# 天国の悪魔払い

— マーク・トウェインとアメリカ・インディアン —

田部井 孝 次

## 1. マーク・トウェインのなかのインディアン

1861年、始まったばかりの南北戦争に義勇兵として参加したマーク・トウェインことサミュエル・ラングホーン・クレメンズ (Samuel Langhorne Clemens) は、戦場から早々に退散し、ネヴァダ準州の秘書官に任命された兄オリオン (Orion) に同行して西部への旅に出た。同年7月のことであった。戦争の煽りを食ってミシシッピ川蒸気船のパイロットの職を失い、戦争にも嫌気がさしていたトウェインは、西部で金鉱を掘り当て一旗揚げようという魂胆であった。カーソンシティを本拠地に、鉱脈を求めて歩き回ったが、この目論みは見事に当てが外れ、金一粒、銀一粒お目にかかることはなかった。西部で大金持ちになり、兄共々故郷に錦を飾って世間を見返してやるつもりが、政府要職にある兄に借金しては鉱脈探しに出かけるという情けない貧乏生活を送るはめになった。

金鉱にも銀鉱にも見放されたトウェインであったが、後に彼を東部の文壇に送り出し一躍有名人に仕立て上げたほら話という鉱脈を掘り当てた。あの飛び蛙の話だ。その後彼は東部に移り住み、とんとん拍子にことが運びアメリカ文学界の大御所にまで上り詰めるが、しかしこの時彼は文学者としての評価を左右しかねない厄介なものを背負い込んで東部へ乗り込んだ。それは彼のアメリカ・インディアン観だ。彼の人気は、齒に衣着せぬユーモアと風刺にあることは間違いない。社会やひとをちくりと刺す彼のユーモラスな話を読者・観客はその痛さ痒さに笑い出し、拍手喝采を惜しななかったが、ことアメリカ・インディアンのことになると、そこにはユーモアとか風刺の域をはるかに超えた露

骨なまでの冷やかしゃ嘲りが含まれ、トウェインの嫌悪感さえ感じ取られ、読者を驚かせずにはおかない。マイナーな存在、弱い立場のものに対するトウェインの反権力的な眼を知る読者にとって、彼のアメリカ・インディアン観はにわかになんて納得しがたい。

なぜアメリカ・インディアンに対してだけ憎悪の念を持つのか。兄オリオンの赴任地カーソンシティに到着して7ヶ月後の1862年3月、トウェインは母ジェイン (Jane) 宛の書簡のなかで、彼が出会ったパイユート族、ワッシュ族、ショーショーニ族などのインディアンについて報告している。まず、ネヴァダ準州ではインディアンは「堂々たる森の子」と呼べる代物ではなく、ここでは「悪魔の子」と呼ばれていると報告する (*Mark Twain's Letters*, vol. 1 175)。自分のインディアンに関する報告は、ジェームス・フェニモア・クーパー (James Fenimore Cooper) の小説から寄せ集めたものなどではなく、個人的観察によるものであり、十分信頼に足るものであることを強調したうえで、ワッシュ族酋長 (フープ・ディ・ドゥードゥル・ドゥ) について、衣服に泥と油がこびりついてその赤色もくすんでしみだらけになってしまっていること、また強烈な悪臭をあたりにまき散らしていることなど、ほらを交えて報告している。

酋長が外に出たら、そのあとについて、歩いたところに火薬をまいて燃やさないといけないんです。だって、歩いていると体から寄生虫が落ちてくるんですから。その大きさといったら、小麦の粒をごくりと一飲みしたのに、まだおなか为空いているといった感じのばかでかさなんです。酋長は自分から進んで落としているなんて思っちゃいけませんよ。そういうことじゃないんです、お母さん。お母さんにはわからないでしょうが、酋長はちゃんと知っているんです。つまり、寄生虫がおいしいってことを。さてさて、クーパーにそんなことがありますか。たぶんないでしょう。裁判官の前に立って証言してもいいですよ、私の説明は何から何まで正しいってことを。フープじいさんも「うんとうめかった」っていつてくれるでしょうよ。(177)

本人としては、インディアンを買いかぶっている母の目を覚まそうと工夫を凝らしておもしろおかしく表現したつもりであろうが、かなり毒のある辛辣なインディアン評になっている。果たして母がこれをどう読んだか記録にないが、トウェインの弱者に対する眼を養ったのが母であったことを考えると、まさか大口あけて笑ったとは想像しにくい。クーパー流のインディアン観に染まっていた母であってみれば、我が子の報告を読んでただただ唾然としただけだったかもしれないが、一步進んで、ここまでひとを小馬鹿にした25歳の息子を、まさか叱ることはできまいが、たしなめる気持ちにはなったかもしれない。いずれにしても想像の域を出ないが、クーパー流の「気高き赤色人種」とか、逆に頭皮剥ぎの残虐な野蛮人という眼で見られていたインディアンが、実は白人によって土地を奪われ生活の糧を失った虐げられた人々でもあることを知る者にとっては、笑ってすませられる話ではない。

ネヴァダ準州カーソンシティを目指しミズーリ州セントジョーゼフから駅馬車の旅に出て16日目の8月10日、マーク・トウェイン一行はユタ準州ソルトレークを過ぎ塩砂漠に突入する。やっとの思いでここを抜け出し、いよいよネヴァダに足を踏み入れるというあたりで、トウェインは彼のインディアン観を決定づける部族に遭遇する。ゴシュート・インディアンである。そのインディアンをトウェインは、「今まで見たなかで最も惨めなタイプの人類」(*Roughing It*, 1872, 126)と呼ぶ。北米大陸で一番劣った未開人種であり、南米フェゴ島土着インディアンやホットントットにもかなわず、唯一同レベルなのはアフリカ南部のブッシュマンだという(126-7)。「自らは何も生産せず、集落も持たず、厳密な意味で部族的共同体といったまとまりもなく、住まいといえば、茂みにぼろきれをかけて雪をわずかばかり避けられる程度のものしかない」(127)。そういうゴシュート族が、駅舎近辺にたむろし、そこから出るゴミや残りものをあさって暮らしている。「体は小さく、やせこけた『發育不全』の生きもの、肌は普通のアメリカ黒人のようにどす黒く、顔や手には、その持ち主に応じて何ヶ月、何年、いや何世代もの間たまりにたまった汚れがこびりついている。……狩りをする。といってもウサギやコオロギ、バッタのたぐいを殺して食うか、はげたかやコヨーテから屍肉を横取りする程度で、それ以上な

んとかしようという覇気がまるでない。……戦闘となるとウサギ並みの連中が、2、3ヶ月駅舎から出る残りものをあさって生きていたかと思うと、何も災いも起こりそうもない闇夜に紛れて建物に放火し、飛び出してくる男たちを待ち伏せして殺してしまう」(127)。いつもこそそとあたりをうかがい、何を考えているのか見当もつかないインディアンにトウェインは嫌悪感を覚え、吐き気を催す。「クーパーの弟子、赤色人種、あの『モヒカン族の最後』の学識ある未開人の崇拜者」であったトウェインは、「もしかしたら赤色人種をロマンスの甘い月明かりのなかで見て過大評価していたのではないか」という思いに駆られる(128-9)。すると、飾りものや塗りものでおめかししたインディアンの化けの皮がはがれ、出てきたインディアンはただの「油断のならない、うす汚くて胸糞が悪くなる連中」(129)というわけだ。そして唾棄せんばかりの勢いでまくしたてる。「インディアンといえば、環境や境遇によって多少の違いはあるにしても、結局ゴシュートではないか。哀れみに値する惨めな生きものだ。私だって哀れむのにやぶさかではない。しかしそれは遠く離れていればの話であって、近くにいたら、誰だって哀れむなんて気持ちにはなれまい」(129)。

ところでカーソンシティの南東約100マイルの所にモノという名の湖がある。トウェインは鉞脈探しの合間にこの湖を探索している。ユタ、ネヴァダにわたるこの辺一帯の湖と同様モノ湖はアルカリ成分が多く飲み水には適さない。これは、トウェインの筆にかかる次のようになる。「白人にはモノ湖の水は飲めたものではない。ほとんど混じり気のない灰汁(lye)だからだ。ところがこの周辺のインディアンは時々これを飲むという話だ。なるほどありえない話ではない。だってインディアンは私が会ったなかでも一番混じり気のない嘘つき(liar)だからだ」(*Roughing It* 247)。インディアンをだしにしたこのような駄洒落で読者をけむに巻いて悦に入る。またモノ湖の風景を見て次のように描写する。「神の摂理に偶然ということはない。ものにはすべて、自然の理法に則ってそれなりに適した用途、役割、場所というものがある。鴨は蠅を食い、蠅は虫を食い、インディアンはそれら全部を食い、山猫はインディアンを食い、白人は山猫を食う。それですべてはめでたしめでたしというわけだ」(247)。モノ湖にはアルカリ濃度が高いため魚などの生物は一切生息していな

いが、野鴨やカモメが湖面を泳いでいる。また時期になると長さ1インチ半ほどの線虫が大量発生し、湖岸近くの湖面を灰白色に染める。湖岸に打ち寄せられた虫を求めて蠅が湖岸を黒い帯となって埋め尽くし、卵を産みつけている。この風景をトウェインは描写しているわけだが、実際パイユート・インディアンは蠅のさなぎを乾燥させて食していたようだから (George J. Williams III, *On the Road with Mark Twain in California and Nevada* 34), 一概に単なるほら話ともいえないが、この辛辣な食物連鎖にマーク・トウェインが置いたインディアンのランクが見えてくる。

カーソンシティの西隣り、カリフォルニア州との州境にタホー湖がある。トウェインは、ヨーロッパ取材旅行の際立ち寄ったイタリア北部にあるコモ湖とこのタホー湖を比較して次のように述べている。ほかに類を見ない清澄な水をたたえるタホー湖は、今も昔も静謐・雄大な景観を有し、訪れる者に癒しの空間を提供しているが、トウェインはこれをインディアンと絡めてぱっきりと切る。

タホーとはバッタの意味だ。バッタスープという意味だ。これはインディアン語だが、確かにインディアンを連想させる。パイユート語だという者もおるが、たぶんディガー語だろう。ディガー・インディアン [掘った木の根を糧にしているカリフォルニアのインディアン] に名付けられたのであれば納得のいくところである。あの退化した野蛮人は、死んだ縁者を焼き、それを人間の脂肪と骨灰をタールと混ぜて、頭や額、耳などに厚く「ぬりたくり」、丘々をワーワーギャーギャー奇声を発して飛び回り、それで喪に服しているというのである。湖の名付け親はこういったやからなのである。

タホーとは、「銀の湖」だとか「清澄なる水」だとか「落ちゆく葉」という意味だなどという者もおる。ばかな！バッタスープがその意味だ。ディガー・インディアン、パイユート・インディアンの好物のバッタスープではないか。この実利主義のご時世にインディアンの詩について語るなど時間の無駄というものだ。フェニモア・クーパーのインディアンでもあるまいし、そんなものがあつたためしはないのだ。(The Innocents Abroad,

1869, 263-4)

1870年の *The Galaxy* に掲載された備忘録 "The Noble Red Man" (1870) がトウェインのアメリカ・インディアン観を決定づけたといっても過言ではなからう。この備忘録でトウェインは今までのインディアンに対するロマンティックな見方に公然と反旗を翻し、「高貴なる赤色人種」というイメージに踊らされた「人道主義者たち」をこき下ろしている。書物に書かれているインディアンは、「背が高く、肌は黄褐色、筋骨たくましく、立ち居姿も背筋がすっと伸び、堂々たる風采をしている」(426)。比喩に満ちた詩的言語を持ち、ロマンティックな愛を知る気高きひと、これが書物に描かれた赤色人。ところが実際のインディアンはどうか。トウェインは現地で実際目撃したインディアンを後ろ盾に、鼻息も荒く弁じ立てる。「ちびでやせこけ、黒くてうす汚く、……どう見ても浅ましく見下げ果てた」連中、「貧乏で汚らわしい裸のごろつきそのもの、こんなやからは絶滅する方が、神から見たらインディアン以上に価値のある昆虫やかげにとってどんなにありがたいことか。いつも虐げられ、捕まえられるては食われてしまっているのだから」(427)。そして彼らの暴力性、残酷性に触れ次のように述べ立てる。

野蛮人の支配的な特徴は、貪欲で飽くことを知らぬ利己主義にある。……その心は嘘と裏切り、卑劣な悪魔のごとき本能の汚水溜め。感謝の念などというものは持ち合わせていないのだから、親切なことをしてやっても、決して背を向けたりしてはいけない。親切にしてもらったお礼にいつ矢が飛んでくるかわかったものではない。……臆病者で、こちらが油断しているすきに襲ってくる。夜に紛れて待ち伏せし、こちらがひとりのところを5、6人が束になって襲いかかり、無力な女子供を殺し、男たちの寝首をかくようなまねをする。(428)

そして、ドゥ・B・ランドルフ・カイク (De B. Randolph Keim) の *Sheridan's Troopers on the Borders* (1870) からの一節 (「捕まった白人の子

供たちは親の面前で生きたまま焼き殺され、妻は夫の面前で強姦され、夫は手足を切断され、拷問を受けて頭皮を剥がされ、妻はその様子を見ているよう強要された」(428)を引用して、改めてインディアン全般の残虐性、油断のならない卑怯な振る舞いをあげつらっている。そしてこれほどに残虐非道なインディアンについて、なおも勇壮果敢で寛大な性質を云々する東部の「人道主義者」を批判する。「彼らはいつも虐げられたインディアンの視点から物事を見るばかりで、夫を殺され後に残された白人の妻や子供の視点に立つことは決してないではないか」(429)。

インディアン問題の複雑さは、ふたつの視点から生じる。アメリカの土地を我がものとして拡大を図り、インディアンはそれを暴力で阻もうとする残虐な悪魔という白人のピューリタンの視点に立つか、白人によって理不尽にも土地を奪われ、それを取り返そうとして暴力には暴力で対抗する被迫害者としてのインディアンの視点に立つかによって、まったく反対の対応を迫られる。さらに問題を複雑にしているのは、単なる善悪の二極化による判断では、物事は一層泥沼化するという現実だが、このことは第2章で検証することにして先を続けよう。今まで見てきたように、トウェインの視点は1860年代、70年代を通じて反インディアンの立場をとってきた。彼の考えは、後のアメリカ26代大統領セオドア・ローズヴェルト(Theodore Roosevelt)に引き継がれている。ローズヴェルトは当時のセンチメンタルな歴史家たちを槍玉にあげ、彼らは「われわれが立ち向かってきた困難や、われわれが耐えてきた悪行や挑発には一顧だにせず、われわれが当然責任を負わなければならない、嘆かわしくも白人による多くの不正行為をこれ見よがしに誇張しただけだった」(134)とあって、*A Century of Dishonor* (1881)の作者ヘレン・ハント・ジャクソン(Helen Hunt Jackson)を「愚かな感傷主義者」のひとりとして非難し、逆にインディアン捕虜記 *Our Wild Indians: Thirty-three Years' Personal Experience Among the Red Men of the Great West* (1882)を著したりチャード・I. ドッジ(Richard I. Dodge)を、インディアンを公正に描いているとして高く評価している。このドッジについては、また第2章で触れることになるが、実はトウェインも彼の記録を高く評価しており、インディアン観を形成

するうえで大きな力になったことは間違いない。ドッジの記録が公正であったかどうかはともかく、インディアン駆逐に躍起になっているアメリカ陸軍高級将校の視点から書かれているわけで、敵方の行為を残虐非道に描くことは避けられず、それをトウェインは鵜呑みにし、被害者としての白人の視点を拡大したためか、インディアンの視点を見失った感があることは否めない。「インディアンはなぜひとを殺すか。人殺しが好きだから」(524)とか、「インディアンの残忍性は生まれながらのもので、終生ついて回る」(534)とか、「捕虜になった白人女のことを描くとき、クーパーや他の作家はインディアンの性格とか習慣とか何も見えていない」(529)といったドッジの言葉は、40を過ぎたトウェインの負のインディアン観を強固なものにしたと同時に、あとで触れるように、それに影をさすきっかけを作ったといえることができる。

マーク・トウェインが"Fenimore Cooper's Literary Offenses"を発表しクーパーの文学的欠点を指摘したのが1895年、それより40年以上も前に、フランシス・パークマン(Francis Parkman)はクーパーのインディアンに触れ、その人物描写は表面的で事実即して描いていないし、彼らの長たらしい会話も嘘に満ちているばかりか退屈でさえあると批判し、さらに「長い間アメリカ文学にとってちょっとした害になってきた未開人の英雄や恋するひと、賢人などを生み出した責任はクーパーにある」とまでいっている(439)。パークマンといえば、*The Oregon Trail* (初版は*The California and Oregon Trail*, 1849)の著者であり、トウェインもその著書を*Life on the Mississippi* (1883)などの作品に引用し、蔵書として大切に保管していたらしいが(Walter Blair 84)、ドッジとともにインディアンに関してトウェインに大きな影響を与えたひとりであることは間違いない。そのパークマンの*The Oregon Trail*を匿名ながら大々的に批判したのがハーマン・メルヴィル(Herman Melville)であった。1849のことである。*Typee* (1846)や*Omoo* (1847)を発表し、南太平洋の未開人と生活をともにして、いわば原始的無垢を垣間見たメルヴィルにしてみれば、パークマンのインディアン観を黙って見過ごすことはできなかったであろう。文面は穏やかながら、筆致にはかなり激しいものがある。「本書を読むと、インディアンと生活をともにしたうえで彼らを畜生よりも非常に優れ

ていると考えることは、誰であれ白人であれば無理な相談である、とある。また白人にとってインディアンを殺戮することはバッファローを屠殺することと何ら変わらない、ともある」とメルヴィルは始める (437)。

ご意見は尊重するが、反対を表明することをお許しいただきたい。

しばしばあることだが、文明人が未開人のところに逗留するとすぐに侮り蔑むようになる。多くの場合この感情はほとんど自然なことではある。しかしながら、弁護できるものではないし、完全に間違っている。……未開人を軽蔑したくなってきたときは、そうすることによって我々自身の祖先をも中傷していることを肝に銘じるべきだ。彼らもまた未開人だったのだから。……我々はみな、アングロサクソンも、[ボルネオ島] ダヤク人も、インディアンも、源はひとつであり、同じ姿形に創られている。今はこの兄弟という間柄を悔やむことはあっても、いずれ将来手を取り合わなければならなくなる。不運は過ちではないし、幸運は価値のあるものではない。未開人は生まれながらにして未開人であり、文明人はその文明を受け継いだに過ぎず、それ以上のものではない。

見下すのではなく、哀れむようにしよう。神の姿が認められたら、たとえそれが絞首台からぶら下がっていても、敬意を払おうではないか。(437-8)

同じ文学者でありながら、パークマンに対してトウェインはメルヴィルとはその立場を異にした。メルヴィルの観察は鋭い。トウェインはインディアンを身近にしたとき、まさにメルヴィルの推察通りの反応を示した。すでに見たように、トウェインも哀れむことはやぶさかではなかった。しかしそれはインディアンがどこか遠くにいるときの話であって、身近な存在、同じ人間、兄弟として考えることはできなかった。実はトウェインも後年南太平洋への旅の体験談を書き (*Following the Equator*, 1897)、原住民について同情的な姿勢を見せているが、これは後で触れることにして、ここでは60年代から70年代にかけてのトウェインは、メルヴィルの批判するパークマンと何ら変わるところはな

かったというにとどめておこう。

パークマンにしてもドッジにしても、白人を残酷非道なインディアンの犠牲者と見る視点で共通している。トウェインが彼らを読み、インディアンの凶悪性に敏感に反応し、日頃はおとなしく白人集落をうろちょろし、物乞いをして食いつないでいる連中が、突然白人を襲撃し悲劇のどん底に突き落とす、という思いに駆られるのも無理はない。

おとなしく、こそこそして油断のない風体の人種だ。書物でお目にかかる (かからない) すべての「気高き赤色人種」と同様、いろんなものに密かに眼を配っているが、決してそれをおもてには出さない。ほかのインディアンと同様、怠惰で、常に辛抱強く疲れを知らない。卑屈な食食だ。インディアンから乞食の本能をとってしまったら、インディアンではなくなる。針を失った時計といっしょだ。腹を空かして、それもしょっちゅう腹を空かして豚が食うものなら何でも拒まず、豚が食おうとしないものでもしばしば口にする。(Roughing It 127)

だから、彼らインディアンを白人社会から閉め出すのは時間の問題であった。スミソニアン研究所のアメリカ民俗学の創設者であり、アメリカ地質調査団の団長でもあったジョン・ウェズリー・パウエル (John Wesley Powell) は、ユート族、パイユート族、ゴシュート族、ショーショーニ族に関する特別委員政府報告書 (1874) のなかで、文明社会に野蛮人が混在することによって起こる略奪行為や退廃的影響から白人を守るためにはどうしたらよいかと問題提起して、インディアンが白人のなかにいる以上、彼らを保護するか、絶滅させるか、ふたつにひとつしかない前置きし、インディアンを絶滅から救う道はただひとつ、彼らを保留地に収容することであると提言している (378, 384)。白人の領土拡張に伴い、ますます減少する保留地への囲い込み政策に拍車がかかり、インディアンは住み慣れた土地から切り離され、なかば強制的に保留地への移動を余儀なくされた。兄オリオンがネヴァダ準州秘書官という政府役人であってみれば、その下で働くトウェインも結局政府側の人間ということにな

るのであろう。事実この時期の発言は一貫して白人の視点からなされたものばかりであった。絶滅が無理であれば、白人はいかに安全に暮らせるか。そのためにはインディアンを白人社会から遠ざけるしかなかった。汚らわしいだけならまだしも、いつ襲ってくるかわからない凶暴で危険なインディアンはなるべく遠くへ、人間の寄りつかないような辺境の荒地へと押しやるしかない。1860年代、70年代のトゥェインはそのお先棒を担いだひとりであったことは否定できない事実である。

ここで70年代のマーク・トゥェインの小説をひとつ紹介しておこう。*The Adventures of Tom Sawyer* (1876)である。トムたち3人は海賊ごっこに飽きてインディアンごっこを始める。裸になって全身泥を塗りたいってシマウマのようになる。そして全員酋長になって森を駆け抜け、イギリス人入植地を攻撃する。それから3部族に分かれ、待ち伏せしてもものすごい鬨の声をあげて互いが互いを襲撃し、殺して頭の皮を剥ぐ。「血みどろの一日だった。だからとても満ち足りた一日だった」(137-8)。ここに描かれるインディアン像は最もステレオタイプなもので、白人のなかに浸透していた残虐性のみが強調されて描かれている。それ以上に問題なのはインジャン・ジョーに関する語り手の描写だ。いうまでもなくインジャン・ジョーは何人ものひとをあやめた凶悪犯だ。おまけにインディアンと黒人の混血ときている。悪いうえにもうひとつ悪い条件が重なった感じだ。その彼が逃走の果て追いつめられて洞窟にさまよひ込み、そこで最期を迎える。出口を失い、食うものも底をつき、哀れ餓死の憂き目を見る。洞窟の入り口近くに埋葬され葬式が営まれることになった。ことここに至っては致し方ない。それまでインジャン・ジョー赦免のためにご婦人方が骨折って多くの署名を集めていたが、それも中断された。

嘆願書には多くの方が署名していた。涙もろいおしゃべりな人たちの会合が何度も開かれ、おセンチなご婦人方から委員が任命されて、深き悲しみに打ちひしがれながらも、知事に泣きついて、どうかここはお情けをもってバカになりきり知事としての職責などは踏みつぶしてほしいと嘆願したのである。確かにインジャン・ジョーは村の人を5人殺したと思われてい

るが、それがどうした、というわけだ。もし彼がサタンそのものだったとしても、赦免嘆願書に署名し、おまけにその嘆願書に絶えず壊れてはもる水道から涙をぼつりと落とす軟弱な連中はごまんといだらう。(221)

語り手は構成上マーク・トゥェインということになっている。この語り口にインジャン・ジョーに対するアイロニーはない。あるとしてもそれはインジャン・ジョーのごときやからに涙を流すおセンチな人に対してであって、インジャン・ジョーに対する語り手の筆致はクールなまでに手厳しい。物語に登場するウェールズ人のハックに対する台詞「耳を裂くとか、鼻を削ぐなんて、お前の大げさな作り話だと思ったよ。だって白人はそんなやり方じゃ復讐しないからね。だがインジャンだったら話は別だ。やつならやりかねん」(204)から見て取れるのは白人の偏見の眼がとらえたインディアンが残虐性という固定観念だ。インジャン・ジョーの境遇を同情的に見る白人がいる反面、語り手も含めて、このウェールズ人に代表されるように、インジャンをたちの悪い悪漢の代名詞と見ていた白人が大半であったことは間違いない。インジャンをかわいそうに思うのは「おセンチ」で「軟弱」な連中だけ、というわけだ。

実はインジャン・ジョーにはモデルがいるらしい。らしいというのは、トゥェイン自身のいうモデルと一般にいわれているモデルが食い違っているからだ。トゥェインは『自叙伝』でハック・フィンのモデルはトム・ブランケンシップ(Tom Blankenship)であると表明した後で、トゥェインがモデルとしているインジャン・ジョーの死について触れている。物語のなかではインジャン・ジョーは洞窟のなかで餓死したが、実際はどこで死んだかは覚えていない、覚えているのは彼の死の知らせを受けたのが嵐のような雷雨の夏夜であったというのである。「私のこれまでの教訓から、どうしてここまで自然が大荒れするのかははっきりわかった。サタンがインジャン・ジョーを捕まえに来たのだ。そのことにみじんの疑いもなかった。インジャン・ジョーのようなやつを地獄に迎えるにはおあつらえむきの夜だった。もしサタンがこれほど壮観に登場して彼を捕まえに来なかったとしたら、きっと、それはおかしい説明がつかないと思っただろう」(*The Autobiography of Mark Twain* 68)。

ところが、一般にモデルとされている人物は、1923年、102歳で死亡ということになっている。トウェインより13年長生きしている勘定だ。シェリー・フィッシャー・フィッシュキン (Shelley Fisher Fishkin) の調査によれば、モデルとされている男はジョー・ダグラス (Joe Douglas) といい、黒人とオセージ・インディアンの混血である。幼い時にひとの住まなくなったインディアン・キャンプに捨てられているところを白人 (あるいは黒人) に拾われたという。物語のインジャン・ジョーとは大違いで、人柄もよく正直な働き者で、ひとに危害を加えるような男ではなく、後ろ指をさされることもなく、愛想のよいインディアン・ジョーとして立派に人生を全うしたらしい (42-7)。ところがこの男がああ残虐な殺人鬼インジャン・ジョーのモデルということになってしまった。トウェインはジョー・ダグラスがインジャン・ジョーだとは一言もいっていないし、ハンニバルの住民が勝手にモデルに仕立て上げただけで、ダグラス自身モデル説を否定していたとフィッシュキンはいうのだが、モデルがいたとしたら、どうも状況からしてこのジョー・ダグラスがインジャン・ジョーに最も近いのではないか。トウェインはダグラスをインジャン・ジョーのモデルだとはいっていないといっても、人をあやめたことなどはもちろんなく、正直者で働き者のインディアン・ジョーを悪鬼として描いたとしたら、ジョー・ダグラスがインジャン・ジョーだとは、まさか自分からはいえなかったに違いない。当の本人はハンニバルの一市民としてまだ生きているのだから。トム・ブランケンシップにとってハックのモデルとされることは名誉なことであっても、ダグラスにとってはこれほど迷惑な話はない。ハンニバルにはインジャン・ジョーことジョー・ダグラスの立派な墓石がたてられ観光スポットのひとつになっている。お参りされるのはうれしいだろうが、ダグラスも墓の下でさぞ苦虫をかみつぶしていることであろう。

モデルかモデルでないかという検証はさておき、物語の邪悪なインジャン・ジョーが、実在する善人のインディアン・ジョーを思い起こさせることは紛れもない事実であって、トウェインがインディアン・ジョーを嵐の夜に地獄に追いやってほおかぶりを決め込んで読者をけむに巻いたつもりでも、その事実を消し去ることはできない。問題はこれほどの善良な一市民がどうして悪人に化

けたかである。トウェインが西部の6年間の生活で培ったインディアン観は、パークマン、ドッジ、カイクなどの影響と相まって、70年代になっても偏見の呪縛から逃れられないでいたのである。インディアンが善良であるわけがない。安心してうっかり背でも向けようものならいつ襲ってくるかわからないような卑怯なやからだ。臆病なくせに凶暴で、油断も隙もあったものではない。この眼で見てきたのだから間違いない、というわけだ。当然のことながら、ハック・フィンがそうであるように、インジャン・ジョーは架空の人物である。しかしながら、架空のハックが読者に人間のあるべき真実の姿を指し示しているように、架空のインジャン・ジョーを通して、読者は厳然たる偏見の実態を垣間見るのである。

1849年、メルヴィルは、バッファローの屠殺とインディアンの殺戮を同一視したパークマンを否定した。その12年後、マーク・トウェインはパークマンに加担するように西部インディアンを昆虫やトカゲ以下の絶滅に値する存在として唾棄した。この恨みさえ感じとれる強烈な忌避反応はいったいどこから来るのだろうか。マイナーなもの、弱者に対して確かな眼を持っていたはずのトウェインがいったいどうしたのだろうか。インディアンはマイナーでも弱者でもなかったのか。19世紀アメリカにおいて、インディアンが劣等人種の代名詞のように見られていたことは確かである。多くの白人がそのインディアンの虐殺によりこの世を去ったことも事実である。しかし同時に土地を奪われ生活の糧を失ったインディアンに同情の眼を向け、白人の暴力を糾弾し、告発した白人が少なからずいたこともまた事実である。その両者の狭間にあって互いの言い分を認識していたはずのトウェインは、結局ローズヴェルトと同じように、インディアンに味方する者を、おセンチで軟弱な感傷主義者として切り捨てた。

ジョゼフ・L・クーロン (Joseph L. Coulombe) は、トウェインのインディアン差別の原因を彼の階級意識に求めた。先の見えない西部での暮らしのなかで、眼の前の低劣なインディアンを自分よりも下に置くことによって、少なくとも階級のはしごの一番下の横木からは逃れることができたというのである (104-5)。西部に来る前、4年半の間ミシシッピ川の蒸気船パイロットとし

て月給250ドルという、当時としては破格の高給取りであったトウェインであってみれば (George Williams III, *Mark Twain: His Life in Virginia City, Nevada* 10), 西部の貧乏生活は相当こたえたはずで、クーロンの考えにはうなずかざるをえないが、差別の原因としての希薄さは免れえない。またエリザベス・I・ハンソン (Elizabeth I. Hanson) は、トウェインの描くインディアンには19世紀後半の一般の白人読者層のインディアン蔑視の風潮が反映されていると見た (12)。インディアンの下等性をほらを交え冗談を飛ばしておもしろおかしく描き出す。読者・観客は我が意を得たりとやんやの喝采を送る。人気者マーク・トウェインのほくそ笑む顔が見えるようだ。フレッド・W・ローチ (Fred W. Lorch) がいうように、ゴシュート・インディアンをあれほどまでに激しい侮蔑的言辞を弄してこき下ろしたのも、「歴史的正确性」よりもむしろ「文学的効果」をねらったことだったのかもしれない (1-2)。「1872年、*Roughing It* を出版した頃のマーク・トウェインは、『ありのままの真実』よりも演劇的效果を気づかう文学的ショーマンであった」(2)とするローチの説明は説得力がある。嘘やほらやだましは、西部の新聞記者時代に培ったトウェインのいわばおはこであり、新聞を売るためには平気で事件をでっち上げ、世間を騒がせたのも一度や二度ではない。嘘が発覚して謝罪文まで書かされたことさえある。何とも情けない新聞記者ではあるが、皮肉にもこのだましやほらが文豪マーク・トウェインのいわば生みの親となったのである。

1869年、処女作として *The Innocent Abroad* を出版し、文学者としてこれからという時期だっただけに、いかに多くの読者を惹きつけるかは彼の大きな関心事であったに違いない。かといって、*Roughing It* に描かれたインディアンが嘘やほらで塗り固められているとっているのではない。多少粉飾されていたり、インディアンの負の面が強調されすぎている点は否めないにしても、他の歴史資料を見ても事実に近い点は確かにある。パトリア・トレントン (Patricia Trenton) とパトリック・T・フーリハン (Patrick T. Houlihan) は、その共著のなかで、当時のアメリカ陸軍大佐がゴシュート・インディアンを視察したときの報告書 (1859) に基づいて、ウサギ、ネズミ、トカゲ、蛇、昆虫、イグサ、草の種や根を食する「非常に低劣で不潔」な人種として紹介し

ているし、また政府インディアン局の保護官の公式年次報告 (1857-58) につづさに眼を通し、蛇やトカゲ、草の根などを主食とする「今まで見たこともないような最も悲惨な風体の人間」であることを明らかにしている (250)。

ここに見られるゴシュート・インディアン像は、トウェインが *Roughing It* で描写したものとほぼ重なりと見てよい。ただ、先ほど引用したローチは、トレントン、フーリハン同様インディアン保護官の報告書にあたってはいるが、そこでとどまることなく、その後の年次報国 (1863-64) や内務長官の報告書 (1866-67) にまで眼を通し、それまでのゴシュートとは違って友好的で争いを好まず、勤勉、誠実で、土地を耕し自ら生活の糧を得ようと努力しているゴシュートも紹介している (1)。もしトウェインが1863年から70年までの公式報告書に眼を通していれば、インディアンの置かれている状況 (白人入植者の急激な流入、それに伴う生活手段の激減、飢えるしかない不毛な土地への移動)などを認識できたはずで、たまたま見かけたインディアンをあれほどまでに低評価することはなかったのではないか、それを怠ったトウェインは、結局60年代、70年代を「文学的ショーマン」として生き、東部人が知らないことをいいことに、西部の珍奇な話をどきどきわくわくさせながら、あることないことをおもしろおかしく語って聞かせる「興行師」だったというのがローチの主張である (2)。インディアンはその犠牲者というわけだ。ローチにしてみれば、インディアンがこれほどまでの苦境に陥った理由をトウェインが理解していれば、ということのようであるが、理解はともかく知っていたことはまず間違いない。デイヴィッド・D・アンダーソン (David D. Anderson) は、ジャーナルや新聞を通して、マーク・トウェインは白人によるインディアンに対する不当な扱い、不正行為に関しては知っていたと証言しているし、「19世紀後半の30年間、非人道的待遇、饑餓、凍死、インディアン局の行政的腐敗のニュースは、もはや周知の事実であった」(2)として、トウェインの事実認識を確認している。トウェインには、インディアンに同情し、インディアンへのむごい仕打ちを恥ずべき行為として糾弾した白人がいることを知ったうえで、白人の犠牲者を無視し、インディアンの眼しか持たぬ「人道主義者」を批判した事実がある ("The Noble Red Man")。悪いのはインディアン、インディアンに夫・父親



を殺され、後に残された女子供はどうしてくれるのか、というのがトウェインの言い分。これでは、白人により着の身着のまま土地を追われ、食うすべを失ったインディアンの境遇など考えようもなかったというのが、悲しいかな実情であろう。そんなことより彼らを珍奇な変種動物として東部に売り込んだ方が読者も喜ぶ。そういう意味ではゴシュートならびにパイユートは格好の標的であったわけだ。

なぜインディアンを忌み嫌うのか。結論を急ぐ前にもう一度 *Roughing It* のなかのゴシュート族紹介の箇所を思い起こそう。彼らは駅舎から出る残飯をあさってその日暮らしをしている浅ましい人種のくせに、ある日夜陰に乗り待ち伏せして白人の寝首をかくような油断のならない卑怯者として紹介されていた。こそこそと辺りをうかがい、おどおどとひとの目を気にしながら生きているインディアンのこの突然の凶暴化にトウェインは怯えと同時に怒りを覚える。デイヴィッド・L・ニュークウイスト (David L. Newquist) は、トウェインがインディアンを認められなかったのはこの種の暴力ではないかと推測した (69)。それにしても、白人の側の暴力を無視している点で、トウェインの視点の限界を認めざるをえないが、非暴力的インディアンの存在を考えたとき、果たしてトウェインはこれほどまでに忌避したであろうか、という疑問は確かに成り立つ。

ジェームズ・C・マクナット (James C. McNutt) も暴力説を説くひとりであるが、トウェインがインディアンを「暴力の隠喩」、「非文明的行為の象徴」と見て忌避し、またそれを逆手に取って利用し世間に恐怖を植えつけたことは疑いようがないだろう (240)。インディアンは「小さいときから慣れ親しんだ『ニグロ』とは違うし、恐怖心を持たずに見ることのできた中国人とも違う」とマクナットはいう。「インディアンは、トウェインが属する白人文明社会にとって大きな脅威であった。奴隷のニグロであろうが、自由なニグロであろうが、サンフランシスコのスラム街や鉱山の掘っ建て小屋で不自由な生活を送っている中国人であろうが、みな弱く無力であるのに、インディアンは依然として危険な存在であった」(237)。アメリカ黒人に対するトウェインのスタンスについては、*Adventures of Huckleberry Finn* があり、「A True Story」があるので、今更説明の必要はないだろう。*Roughing It* にカリフォルニアに移住

してきた中国人に関する描写がある。鉱山では働き者であるために結果として白人の職を奪い、そのために差別的排斥運動のなかに身をやつしていたが、トウェインはそういう中国人たちを見てどちらかというと同情的な反応を示した。それは彼らがおとなしく、こちらに危険を及ぼす可能性がなかったからかもしれない。「中国人は人畜無害の人種だ。もっとも白人が静かにほっといてやるか、犬並みの扱いをしてやればの話だ。事実全くといっていいほど、害になることはない。どんなに卑劣な侮辱を受けても、どんなにひどい無礼を働かれても憤慨しようなどと考えることはめったにないからだ。おだやかで、おとなしく、従順だ。酒に酔うということは決してなく、日がな一日せせと働いている」(369)。だからトウェインは、世間が排斥運動で沸き返っているさなかに中国人をすんなり受け入れることができた。

ところがインディアンは、「犬並みの扱い」をして親切にしてやってもなつかない。こちらをじっと見張っているようで何を考えているかわからない。だから怖くて背中向けられない、とトウェインは考える。だれがインディアンにこのような態度をとらせたか、残念ながらこの視点がトウェインにはない。少なくとも、西部にわたった60年代、そしておそらく70年代にも、トウェインにはローズヴェルト同様、北アメリカ大陸はインディアンの独占所有地という考えは微塵もなかったはずだ。ローズヴェルトはいう。「インディアンは土地を所有していなかったし、たとえ所有していたとしても、それはせいぜい我々白人の猟師がしばしば請求するような所有権に過ぎなかったといくら主張しても主張しすぎるといことはない。この大陸の無限の大平原と森をインディアンの所有として認めるならば、すなわち、ほんのたまにしか狩りをしないのに、千平方マイルの領地を1ダースほどのむさ苦しい野蛮人の独占所有として考えるならば、すべての白人の猟師、無断居住者、馬どろぼう、遊牧の牛飼いの要求も同じように認めねばなるまい」(132)。政府役人である兄オリオンのいわば助手として西部に赴くとき、トウェインは我が物顔でネヴァダ準州に乗り込んだはずだ。そしてそこに「よそ者」の薄汚いインディアンがいた。25歳の若気の至りとはいえ、パークマンを批判したメルヴィルのことを考えると、情けないといえば情けない話だ。もっともメルヴィルが批判したのが30歳、ト

ウェインの知らない世界をすでに経験しており、その分差し引いて考えてもよいかもかもしれないが。

ヘレン・L・ハリス (Helen L. Harris) は、マーク・トウェインのインディアン観を考えると、その根底に「男の最悪の暴虐性」を見た。「男は搾取的、破壊的であるが、その極めつけは疑いもなくインディアンの男」(503)だとトウェインは信じていたという。この暴虐性にトウェインは恐れと怒りを覚え、差別化が生まれたということであろう。ところで、1922年ニューメキシコ州を訪れたD・H・ロレンス (D. H. Lawrence) もインディアンに恐れを覚えたひとりだ。トウェインと同じように、鼻が曲がるほどの悪臭に悩まされた。しかし彼は、怒りは覚えなかった。アパッチ保留地で初めて耳にするインディアンの笑い声に白人に対する「無意識の憎しみ」、「愚弄の響き」を察知する (Phoenix 96)。そして太鼓のリズムに合わせた叫び声、笑い声なのか嘲笑なのか、あるいは悪魔の所業なのか、ただの戯れなのか、いずれとも分ち難く、胃の底から絞り出されるような響きを聞き、「痛いほどの悲しみと郷愁、何ものかへの抑え難きあこがれと魂の病」(Phoenix 95)を覚える。ロレンスが感じたのは怒りではなかった。悲しみと郷愁、あこがれと魂の病。1922年、自らの領地を追われ保留地に囲い込まれたアパッチ・インディアンを前にして、無念のうちに死んで行ったインディアンはあの世で癒されることなく、また「我々白人」とその文明を許すことなく、復讐のために亡霊となって戻ってくるという思いに駆られる。なぜなら「我々白人」が彼らをこの地球上から抹殺したからだ (Studies in Classic American Literature 42-3)。

マーク・トウェインには、ゴシュート・インディアンを見ても、パイユート・インディアンと近しくなっても、悲しみもなければ魂の病など感じるはずもなかった。ましてや郷愁やあこがれなどに思いが及ぶわけがなかった。縁もゆかりもないアメリカに渡り、アメリカ白人が行ったインディアンへの残虐行為を我がことのように受け止め、復讐の亡霊におののくロレンスの姿とは対照に、はじけんばかりに膨らんだトウェインの怒りの風船は偏見の悪魔に化けて醜く硬化する。

## 2. 揺れるマーク・トウェイン

1882年、マーク・トウェインはミシシッピ川探訪の旅に出た。ミシシッピ5千マイル約1ヶ月間の長旅だったが、かつて文芸誌に連載していた "Old Times on the Mississippi" を改訂し *Life on the Mississippi* として完成させるためであった。この船旅でトウェインにとって重要な転機となったと思われるものがふたつある。ひとつは南北戦争後の再建時代をかるうじて生き延びた南部黒人の悲惨な状況とミシシッピ川上流におけるインディアンの物語である。戦後の南部黒人の状況がトウェインに何をもたらしたかという問いに対する答えは *Adventures of Huckleberry Finn* 完成までの長い道筋をたどれば自ずと明らかになるが、本論のテーマとは離れることを覚悟のうえで、ここでおさらいをしておいてもあながち無駄ではなからう。1876年 *The Adventures of Tom Sawyer* を出版、同年トウェインはその続編ともいべき *Adventures of Huckleberry Finn* 執筆に取りかかった。16章まで書き終え、17章で新しい局面を迎えるというところで筆が止まった。16章とは親が天然痘だと嘘をついて筏から追っ手を遠ざけ逃亡奴隷ジムを助けるという前半の山場の章だ。このときから数年間トウェインは *Huck Finn* を中断して、ハックを倫理的葛藤のなかに置き去りにしたまま、まるで彼を忘れたかのように、*A Tramp abroad* (1880)、*The Prince and the Pauper* (1881)、*Life on the Mississippi* (1883) を出版している。そして7年の歳月を経て *Huck Finn* 擱筆に至り、1884年12月イギリスで、翌85年2月アメリカで出版する運びとなったのである。先ほど *Huck Finn* を中断してといったが、1880年 *The Prince and the Pauper* 執筆中にも決して忘れていたわけでも、無視していたわけでもなく、ハックの行く末を気にかけ、合間合間に原稿に眼を通していたようであるが (Ron Powers 473)、トウェインの心の揺らぎを押さえ、ハックの地獄行きの決断に至るまでには、ハックがジムをからかい、逆にそれを諷められ、黒人奴隷に頭を下げるのに15分もかかったように (*Huck Finn* 15章)、7年の歳月は欠かせなかったのかもしれない。奴隷解放宣言はすでに発布されているとはいえ、戦後再建時代の人種的混乱状態のなかにあって、逃亡奴隷を幫助することの意

味を考えずにはいられなかったに違いない。その間お茶を濁すかのようにヨーロッパ旅行記を書き、また児童文学執筆に憂き身をやつしていたのであろう。そういうさなかにあって、1882年の南部への旅は、トウェインの眼を否が応でも南部の現実社会に向けさせる結果となり、*Huck Finn* 最大のテーマである人種問題に正面から取り組む大きなきっかけのひとつとなったことはいうまでもない。つまり、南北戦争後の南部社会のなかであえぐ黒人の奴隷的状况が作家マーク・トウェインの筆を動かしたということだ。南部への旅が問題の所在を一層明確にし、トウェインの虐げられた人々に対するもうひとつの眼を養ったのである (Fishkin 97)

さてトウェインが注目したもうひとつの問題はミシシッピ川上流にあった。1882年のミシシッピの旅の最終目的地はミネソタ州セントポールであった。ミズーリ州セントルイスを出発点として一路ニューオーリンズを目指す。取って返して北上しセントルイス、故郷ハンニバルを通過してアイオワ州キーオカックに入る。バーリントン、マスカティーンと来れば、ダヴェンポート、ダビュークは目と鼻の先だ。紀行 *Life on the Mississippi* も終盤にさしかかり、いよいよ 58, 59, 60 章を残すのみ。ここで彼が出会うのがインディアンの物語や伝説だ。ソーク族酋長キーオカックとの覇権争いのなかで、政府に反旗を翻し潔くも敗れ去ったソーク族並びにフォックス族指導者ブラック・ホークの勇壮な生き様が紹介される。さらに船は進み、ウィスコンシン州ラクロスに入り、ウィノーナに向かう。この辺り一帯はインディアンの伝承や物語の宝庫として紹介される。ラクロスから乗り込んだ老紳士からインディアンの伝説をいくつか聞かさせる。そのなかのひとつ、インディアン娘ウィノーナの恋の話に心奪われる。同じ部族の恋仲の男を親が気に入らず、別の立派な戦士に嫁がせようとするが、どうあっても惚れた男が忘れられず、ウィノーナは「乙女の岩」から下にいる親めがけて身を投げ、運良く自分は助かり、親を殺してふたり仲良く添い遂げるといふ、娘の強い恋心を描きながらもどこかやるせない恋話。老紳士によれば、「実に悲劇的で痛ましい話、ミシシッピ川のすべての伝説のなかでも最も有名ではあるが、同時に哀れを誘う話」(577) なのだそう。いずれにしてもトウェインはその男の話に聞き惚れている。同じ男から聞いた、ヘン

リー・ロングフェロー (Henry Longfellow) の *The Song of Hiawatha* (1855) のオリジナルである「ピボーンとシーグワン」の逸話をわざわざ本編に収録までしている。『『ハイアワサ』に使われているが、オリジナル版で読む価値はある。詩の韻律やリズムの助けや恩恵をこうむらなくても、本物の詩がいかにか効果的かがわかればの話だが』(580) とトウェインはいう。また、最終第 60 章、最終目的地セントポールに入って、「白熊の湖」というインディアンの伝説を、ばかばかしいといいながらもわざわざ収録している。気に入っていたのであろう。白熊に襲われたインディアン娘を恋人である勇敢なインディアン戦士が救い出すという話である。『『白熊の湖』にまつわるなんとも馬鹿げたインディアンの伝説がある。できることならそれをここに収録する誘惑に抗したかったのだが、私の力ではそれはかなわなかった』(589)。か弱きインディアン娘とそれを思いやる気高きインディアン、この構図が気に入ったのだろうか。インディアンにまつわる伝承、物語の紹介はこれで終わりではなく、付録としてもうひとつ付け加えるという念の入りようである。よほど気に入っていたに違いない。それは「不死の首」という話で、体は朽ち果てようとも、首だけは生き延び、化け物のような熊から我が妹を助け、よそから来たインディアンも助けるという奇想天外な話だが、トウェインは多分空々しいとも思わず、死して首だけとなってもひとを助けるその心意気に感服していたのかもしれない。

*Life on the Mississippi* の最後の 3 章とその後の付録で取り上げられたインディアンの物語は、男女の恋の話、男の勇壮果敢な物語であった。かつてトウェインが何といていたか思い起こそう。タホー湖を「銀の湖」とか「清澄な水」とか「落ちゆく葉」などといっている人間がいるが、とんでもないと彼はいった。「タホー」とは「ディガー・インディアン、パイユート・インディアンの好物のバツスーブではないか。この実利主義のご時世にインディアンの詩について語るなど時間の無駄というものだ。フェニモア・クーパーのインディアンでもあるまし、そんなものがあつたためしはないのだ」。1869年のことだ。*Life on the Mississippi* の最後の 3 章を詩的なインディアン伝承で締めくくったのが 1883 年。ミシシッピの旅の前半、アメリカ南部の現実社会を見聞し、人間を見る眼、虐げられた人々に対する眼が肥えて、勢いインディアンを複数

の視点から見られるようになったといえなくもない。しかしトゥェインのインディアン観の変化のきっかけとなったのは、どうもそれ以前にあるようだ。

1881年といえば、先ほどおさらいしたように、*Huck Finn* 執筆を中断している時期で、ちょうど *The Prince and the Pauper* を出版した年だ。*Huck Finn* 執筆に行き詰まり、子供相手のお話にうつつを抜かしていたわけでもないようだ。その年の12月、トゥェインはフィラデルフィアのニューイングランド協会の晩餐会に招かれ講演している。晩餐会は1620年のピルグリム・ファーザーズのプリマスへの上陸を祝うものであった。その席でトゥェインは、そこに居合わせた名士たちが拍子抜けするような講演をした。「このピルグリムの何を祝いたいのでしょうか。……12月22日のプリマス・ロックへの上陸を祝うとしても、そのどこに注目に値するようなものがあるのか知りたいものです」(94)と挑戦的に始める。私の祖先はピルグリムではないとトゥェインはいう。「私の最初のアメリカの祖先は、紳士諸君、インディアン、それも初期のインディアンであります。あなたがたの祖先はそのインディアンの頭の皮を生きたまま剥ぎました。そういうわけで私は孤児なのです。今日インディアンの血管には、私の血は一滴も流れていません。私は祖先をなくしてたったひとり、頼る者もなくここに立っています。あの者らが私の祖先の頭の皮を剥いだのです！毛皮が必要だからそうしたのなら、反対はしません。しかしそうでなく、生きたまま、紳士諸君、生きたままですよ！あの者らは生きたまま頭の皮を剥いだのです。それも公衆の面前で！それが私は腹立たしいのです」("Plymouth Rock and the Pilgrims" 95)。そして「インディアンの立場に立って考えてもらえないだろうか。どうぞお願いします。遅まきながら、正義の行為としてそうするようお願いしたい」(96)と頭を下げている。そしてトゥェインは、迫害されたクエーカー教徒を私の祖先と呼び、セイラムの魔女を私の祖先の呼び、あなたがたのご先祖がアフリカから最初にニューイングランドにつれてきた奴隷を私の祖先と呼び、だから私は混血児だと訴える(97)。街の主だった名士を前にして46歳のトゥェインは相当思い切った講演をしたものだが、これで問題になって批判の矢面に立たされて窮地に追い込まれるということがないから不思議である。トゥェインのピルグリム嫌いは今に始まったことではない。

そこは世間も承知であえて人気者マーク・トゥェインにひとつ刺激的で辛辣な講演をしてもらい、笑ってこらえて元気を出そうという魂胆があったのかもしれない。重要なのは、クエーカー教徒やセイラムの魔女、黒人奴隷という虐げられた者たちの側にインディアンがおり、彼らを自分の身内として、彼らの側に我が身を置いて考えている点である。

60年代、70年代のトゥェインを考えると想像もできない視点の転換であるが、ニュークウイストは、この時期のトゥェインはインディアンに対する初期の偏見と無知を乗り越え、インディアンの視点から物事を見つめ心動かされていたようだといっているが(70)、80年代の他の作品を見ると、にわかには信じがたい変わり身の早さではある。"Plymouth Rock and the Pilgrims" を読む限り、81年の時点でインディアンの視点を持つようになっていることは間違いない。しかし、あれほどまでに忌み嫌っていたインディアンに対する偏見と無知を払拭したといわれると、首をかしげざるをえない。後で述べるように否定的な事例がいくつかあるからだ。むしろ、デントンやマクナットが指摘しているように、インディアン批判の眼がピューリタンの伝統を受け継ぐ白人文明に向けられるようになったと見る方が妥当かもしれない(Denton 2, McNutt 232)。マクナットはトゥェインの態度の変化を「狭量な人種的固定観念」から「文化的相対主義」への転換と呼んでいるが(232)、この相対的視点から、旧来のピューリタンの文明社会の陋習が幻滅となって顕在化し、それに反比例するようにゴシュート族やパイユート族に対する偏見は後景化したのだろう。

1906年、マーク・トゥェインは、アメリカを代表する各界の大物たちが参列する晩餐会に出席したときのことを『自叙伝』で回想している。出席者はトゥェインを含め全員がアングロサクソン系である。高級将校であった退役軍人の議長が声も高らかに口火を切った。「私たちはアングロサクソン民族の出です。アングロサクソン人は、欲しいものがあつたらただ奪取するのみであります」。場内からは拍手喝采の嵐。調子に乗った議長。「イギリス人もアメリカ人も泥棒であり、追い剥ぎであり、海賊であります。そしてまたその結合体であることを誇りに思うものであります」(*The Autobiography of Mark Twain*

346)。さて、その場に居合わせたトウェインの反応を見てみよう。

その場にいたすべてのイギリス人、アメリカ人のなかで、潔く立ち上がって、アングロサクソンであることを恥ずかしく思う、人類の一員であることを恥ずかしく思うと表明する者は誰ひとりいなかった。なぜなら、人類はアングロサクソンの汚名に染まることがあっても、その汚名の下にとどまらなければならないからだ。私にはそのような努めを果たすことはできなかった。かんしゃくを起こし、ひとりいい子になって大見得を切り、自分の優れた道徳観を誇示してこの幼稚な連中にきちんとその基本を教えようなどという気にもなれなかった。彼らにはそれを把握し、理解することなどできるはずもなかったからだ。(346)

1881年のフィラデルフィアでの講演のときの勢いはもはや感じられないが、アメリカを我が物顔でのし歩くアングロサクソンへの苛立ちと諦め、自らがアングロサクソンであることへのやるせない思いが伝わってくる。アングロサクソン社会の「帝国主義」、「愛国主義」はもはやマーク・トウェインという時代の寵児をも置き去りにして、アメリカを驚掴みにし、その醜き翼で世界を覆った。トウェインの憤怒と憎悪の矛先は、1880年代を境にして、アメリカ・インディアンから、驚になった「ピューリタン」へと向けられたが、20世紀に入ってその矛は驚の嘴を前に鋭さを失っていった。しかし、鋭さを失ったとはいえ、1910年この世を去るまでその矛先が驚からそれることはなく、にらみを利かし続けたことは注目に値する。

1905年のトウェインの70回目の誕生日(11月30日)は、ちょうど感謝の日(11月第4木曜日)と重なっていた。そこでトウェインは、冗談か本気か、ある出版社の社長に働きかけて大統領に感謝祭を1年延期させようとした。この1年間許しがたい不道德な事件はあっても、感謝しなければならないことは何も起こらなかったから、というのがトウェインの理由だ。国の祝日を個人の誕生日のために変更させようとは何という思い上がりかと思えなくもないが、トウェインの感謝祭の解釈がふるっている。感謝祭はもともと隣人であったイ

ンディアンを皆殺しにし、なんとか生き延びたことを感謝するものであったという。今では白人を脅かすインディアンはいないし、もはや感謝する理由もなくなったのに、ただの習慣として残っているだけ(*Mark Twain's Autobiography* 291-3)。これがマーク・トウェインの感謝祭だ。理不尽にもひとつの人類種を絶滅に追いやり、ありがたいと思う白人の厚顔無恥さにあきれたトウェインの痛烈な皮肉がここにある。ピルグリムたちはインディアンのおかげで生き延びたのではなかったか。

自分がアングロサクソンであること、そのアングロサクソンを否定するという自家撞着的言説は、マーク・トウェインを徐々に絶望に陥れた。しかしながら、それでインディアンへの偏見が消えたことにはならない。1880年代、トウェインのインディアン忌避の姿勢は、白人文明への強烈な批判に押されてかつての勢いを失い、白人とインディアンの間で揺れ動き混迷の度を深めながらも崩れることはなかった。

そこで、インディアン問題を考えるとき80年代の最大の問題作ともいうべき "Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians" (1884年頃執筆)をまずあげなければならないが、その前に同じ80年代のふたつの大作 *Adventures of Huckleberry Finn* (1885、イギリスでは *The Adventures of Huckleberry Finn* として1884年に出版)と *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (1889)においてインディアンがどういう風に触れてられているかを知ることが、トウェインのアメリカ・インディアン観の変遷を知るうえで参考になるだろう。1883年出版の *Life on the Mississippi* は、すでに取り上げたように、アメリカ・インディアンに関する記述に事欠かないが、どういうわけか *Huck Finn* にはほとんどといってよいほどない。1カ所、21章において、16歳のひとり娘を持つひとのいいボグズじいさんがインディアンに例えられる程度だ。酔っぱらうと手に負えなくなり、悪態については大騒ぎを起こすが、決して嫌われ者ではなくことは穏便に収まっていた。それがよりによってシャーバン大佐に楯突いた。相手が悪かった。いくら酔っぱらって悪態をつくことはあっても、決してひとを傷つけるような仕儀に及ばないことは街の知るところであるが、シャーバンにはそれが通用しない。酔っぱらって街を馬で乗り回し、

「インジャンのようにワーワーギャーギャーわめき散らして」(184)、おいシャーバン、出て来いと、かなうはずもない相手を挑発した。案の定ボグズは射殺され、哀れこの世の荒波も知らない娘ひとりが残される。街の者はボグズに同情し、シャーバンをリンチにしようとするが、シャーバンの剣幕に恐れをなし情けなくもすごと退散するという章であるが、酒を飲んで威張り散らし騒ぎを起こすお人好しの好々爺、これが屈強な男にいとまたやすく撃ち殺される。この哀れなボグズとインディアンの姿が重なって描かれているあたり、60年代、70年代とは違ったトウェインのインディアン観を垣間見ることができのかもしれない。しかし、1889年の *A Connecticut Yankee* を見ると、また60年代に逆戻りしたような印象を受ける。16世紀のアーサー王宮廷に囚われの身となった主人公ヤンキーは、かつては権勢を振っていた者たちも収監されていることに気づく。拷問を受け手ひどい傷を負っているにもかかわらず、うめき声ひとつあげず、不平をいうでもなく、静かに耐えている。それを見てヤンキーが侮蔑を込めて述懐する。「悪党どもめ、自分たちが権勢をほしのままにしていたときは囚人に同じような扱いをしていたものだから、立場が逆転して今度は自分たちが囚人になってもそれ以上の扱いなんか期待もしていないのだ。あの平然とした態度は精神的訓練とか知的強靱さの結果でも論理的帰結でもない。ただの動物的訓練にすぎない。やつらは白いインディアンだ」(40)。ここでは地に落ちたかつての権力者を本能で動く動物として貶め、白いインディアンとして蔑視している。

80年代のインディアン関係の乏しい資料から、このふたつのインディアンのイメージを見ても、視点が、あるときは右にまたあるときは左に揺れ動き、一定の方向を示していないことがわかるだろう。これがトウェインの80年代のインディアン観といってもさしつかえない。

さて、以上を前置きとして肝心の "Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians" を見てみよう。80年代のインディアン像の揺れ動きが一層鮮明になるはずだ。この作品は未完ではあるが、インディアン問題を解く鍵となる極めて重要な作品として位置づけられる。また *Adventures of Huckleberry Finn* の後日譚として読むことこともできよう。トムとハック、そして自由の身となっ

たジムの3人は、インディアン・カントリーを目指して冒険の旅に出る。トムがふたりを誘ったのだが、ハックもジムも最初乗り気ではなかった。インジャンは卑劣だからとジムがいう。するとトムが卑劣だなんてとんでもない、世界で一番高貴な人間で、勇気があり寛大でしみつれたところがこれっぽっちもないと諭す。

「彼らは恐ろしく強くて、情熱があり、雄弁できれいな衣を身にまとっているんだ。いくさ化粧をしてモカシンをはき、全面ビーズのついた服を着て、それで1年中毎日戦いに行き頭を剥いで高貴な時を過ごすんだ。日曜日は別だけどね。それに友好的な白人が好きで、しかも熱愛している。彼らのためならどんな努力も惜しまないんだ。彼らを傷つけるくらいなら死んだ方がましだと思ってるんだね。ニガーも他の人間と全く同じだと考えているんだ。……」(36)

トムにこれほどまでにいわれては、もはや断る理由はない。トムを信じたふたりは納得し、3人仲良く出立とあいなる。1週間ほどしてオレゴンを目指すミルズ一家と出会い、総勢10人で旅を続ける。そして2週間後、合衆国を離れ大平原地帯に入ったところで待望のインディアン5人と遭遇する。トムがいった通り愛想のよいインディアンで早速仲良くなる。が、あることをきっかけにして、にわかに彼らの様子に変化が現れ、7歳と17歳の娘ふたりを残してミルズ一家を惨殺するという暴挙に出る。トムとハックは、いち早く危険を察知したトムの機転で九死に一生を得るが、ジムは娘ふたりとともにインディアンに連れ去られてしまう。トムの話とはだいぶ違う展開になってしまい、ハックがトムに尋ねる。「トム、インジャンのことどこで習ったんだ。高貴だとかなんとかさ」(50)。するとトムは、しょげ返って、クーパーの小説だと答える。気まずい雰囲気がふたりを包む。さて、ジムと娘たちを取り戻そうとインディアンの跡を追うが、途中17歳の娘ペギーのものとおぼしき血のりのついた服の切れ端を見つける。あたりを探すと白人女の靴跡を発見、さらに地面に4本のくいが打ち込まれている現場に出くわす。明らかに拷問のあとだ。そしてか

すかな希望を胸にさらにインディアンを追跡する、というところで物語はぶつりとして終わってしまうのだ。つまり未完ということなのだか、なんとも後味の悪い幕切れだ。

ところで、愛想のよいインディアンの様子が変わったきっかけとは、こういうことだ。17歳の娘にはブレイス・ジョンソンという恋人がいて、もうすぐ一行に追いつき同行することになっていたのだが、ハックは何を思ったか、インディアンにその娘の友だちが7人もやって来ると嘘をついた。これでインディアンたちの様子がおかしくなり、なにやら慌ただしい動きを見せる。インディアンのこのきな臭い態度にいち早く気づいたトムの機転で、ふたりはインディアンたちから離れることに成功し、命拾いしたというわけだ。このブレイス・ジョンソンという男は、あとでトムとハックに加わり、ジムと娘たちを探してインディアンの跡を追うことになるが、ハンサムな上に6フィートを超す屈強の男で、インディアン・カントリーの地理に明るく、インディアンを獣としか見ない白人男として紹介されている(60-1)。ということは、インディアンが蛮行に及ばず、白人家族とともにいるところをジョンソンに見られたら、と想像すると、また違う恐ろしい展開が予想されるが、トウェインはあえてこの展開を避けたと考えるとおもしろい推測が成り立つ。つまりインディアンをバッファロー並みの獣と見て殺戮に胸を痛めない白人とインディアンが対峙するという構図になり、まさにアメリカ・インディアン虐殺史の縮図がここに出現するわけで、これでは悲惨な歴史の繰り返しにすぎない。こういう展開にはしたくないとトウェインは考えたのかもしれない。ただ逆に、ハックの嘘は文字通りきっかけでしかなく、いわばスプリングボードであって、インディアンの目的は最初から娘ベギーひとり、敵意がないように見せかけて白人に近づき、隙を見計らって襲いかかる、まさにトウェインが60年代に見聞した、あの油断も隙もない卑怯な裏切り者としてのインディアンの再現という構図も成り立つ。このアンビヴァレントな構図のなかにあってはっきりしていることは、この物語は白人によってインディアンが殲滅されるという話ではなく、トウェインの憎むインディアンの暴力によって白人家族が惨殺され、しかも悲惨なことに、17歳の娘があたかもインディアンの拷問を受け強姦されたかのように描かれ、

生きているのか死んでいるのかさえわからないまま中断し、そのあとどう読むかは読者がハックとトムそしてブレイス・ジョンソンの跡を追いかけて判断するしかない、そういう物語であるということだ。

トウェインはかつて *Huck Finn* を中断し7年後に執筆を再開したという前歴がある。この物語はその *Huck Finn* 完成の年に書かれたといわれているのであるから、時期的にもその後の成り行きを書く時間はいくらでもあり、物語を完成させることはできたはずなのに、なぜ投げ出してしまったか。 *Huck Finn* には中断せざるをえないそれなりの理由があった。また執筆再開にもそれなりの理由があった。恐らく "Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians" にも中断せざるをえない理由があり、 *Huck Finn* と違って再開できない理由があったのであろう。1969年、ウォルター・ブレア (Walter Blair) は、カリフォルニア版 *The Mark Twain Papers* のなかの一卷 *Mark Twain's Hannibal, Huck & Tom* のなかに収められた "Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians" の解説で、トウェインがこの小説の重要なテーマを描き切っていないことに不満をもらしているが(90-1)、そこに批判的口調は感じられない。というのは、すでに紹介したように、そこで扱われているのは、ひとことではいえば、インディアンの暴力行為であって、なんの罪もないミルズ夫妻と息子3人を惨殺し、連れ去った娘のひとりに暴行を加えたということになると、トウェインとしてはもうそれ以上のことは小説に書き留めることはできず、「もうこれ以上のことは書けませんという終わり方にしたのもわからなくはない」(91) という考えが根底にあるからだろう。4本のくいが地面に打ち付けられているということは、そこで間違いなくインディアンによる拷問が行われた、そしてその近辺に白人女の足跡や血のりのついたベギーの服の切れ端があったということは、拷問を受けたのはベギーだったかもしれず、ベギーが17の生娘であったことを考えると……。だから筆が止まったとブレアは考える。しかしベギーだというのははっきりした証拠もなく、拷問を受けたのは他の女か男の可能性も残されており、ベギーは何事もなく無事発見される、こういう「ハッピー・エンディング」もトウェインの頭にあっただのではないかというのである(91)。

ブレアは、トウェインがこの作品を書くにあたって、インディアン関係の書

物をいくつか資料として読んでいたと指摘し、解説のなかで紹介している。"The Noble Red Man" のなかでも触れられていたドゥ・B・ランドルフ・カ  
イム、そしてフランシス・パークマン、リチャード・I・ドッジ、それからバッ  
ファロー・ビルとして有名なウィリアム・F・コーディ (William F. Cody)  
の自叙伝 *The Life of the Hon. William F. Cody, Known as Buffalo Bill, the  
Famous Hunter, Scout and Guide* (1879) などを紹介し、なかでもドッジの  
*Our Wild Indians* からのインディアン関係の情報が作品の至る所に散見でき  
ることを突き止めた。特に物語の終盤の拷問が行われたとおぼしき場面に出て  
くる4本のくい。この意味はほとんどドッジの本から取られたものであり、被  
拷問者は4本のくいに手足を縛られなぶり殺しにされるというものだが、そば  
にあったペギーの服の血のついた切れ端、白人女の靴跡などからしてこの被拷  
問者はペギーと断定してもよさそうだが (八木敏雄 106-7)、それにしても決  
め手に欠ける。ドッジの説明では、この拷問を受けるのは男であって女ではな  
い。それにそのことを示す図版も被拷問者は男で、インディアンがよってたかっ  
て男をなぶり殺しにする様子が描かれている (527)。捕らえられたなかにジム  
がいたが、しかし、彼は黒人で拷問にあうことはまず考えられない。ブレイス・  
ジョンソンによれば、インディアンの敵ではないからだ。もっともペギーたち  
を助けようと敵対行為をとれば拷問される可能性はなくはないが、それを連想  
させる描写は一切ない。いずれにしても、最後の拷問とおぼしき場面は曖昧の  
域を出ない。ドッジがインディアンによる白人男への拷問と白人女への暴力を  
同じページに段落を変えただけで並べて説明している (529)、ややもする  
と白人女が4本のくいに手足を縛られ、暴行を受けるような印象を読者に与え  
るということはあるえないことではなく、もしかしたらドッジもそれを狙って  
いたかもしれない。現にトウェインが、ペギーが拷問を受け強姦されたことを  
におわせる思わせぶりのサインを送っているということは、彼の単なる誤読か、  
あるいはその曖昧性を確信犯的に利用して女への暴行と男への拷問を一緒くた  
にして読者の目を眩ますという、トウェイン一流の空とぼけた芸当をしたのか  
もしれない。いずれにしても、ペギーが拷問されると同時に暴行を受けた可能  
性は高いとしかいいようがないのかもしれないが、しかしそこで筆を止めてし

まって、読者を宙ぶらりんにしてしまったのであるから、ブレアならずとも、  
人違いの可能性も期待したくなるような、どっちつかずの終わり方になってい  
るともいえるのである。それにしても、ドッジの説明によると、4本のくいの  
拷問の後、その犠牲者はそのまま放置されることがほとんどであるようだから  
(529)、なぜ放置されていなかったかを考えると、やはりこれは男ではなく、  
ペギーであったかというようなよからぬ想像も駆け巡ってしまう。ここでひと  
つ確かなことは、ブレアや八木がいうように、もしトウェインがドッジの *Our  
Wild Indians* を忠実に引用 (援用) したのであれば、捕虜になった白人女は  
例外なくインディアンの餌食になるのであるから、ペギーがインディアンから  
暴行を受けたことは間違いのないことになるし、またトウェインもそういう意図  
を持って描こうとしたのだろう。しかし重要なことは、4本のくいによる拷問  
との絡みで、トウェインが事実を曖昧に、あるいは両義的にぼかした節がある  
ことだ。ドッジに忠実に従っているようで、実は密かに転覆を図っていたので  
はないか、と筆者は考えている。ペギーへの拷問が怪しいとすると (ドッジの  
説明にもある通り、拷問されるのは普通男である)、肝心の暴行も疑いたくな  
る。トウェインの思わせぶりもなにやらきな臭いにおいがしてくる。ドッジは、  
インディアンに捕まった白人女は10人が10人暴行を受けるといはばから  
ず (529)、トウェインはその記述を熟知しながら、その問題を、ひいてはイン  
ディアン問題を闇の奥にしまい込み、沈黙を決め込んだ。さてこの80年代の  
沈黙については、もう少し検証する必要がありそうだ。

ブレアに遅れること27年、八木敏雄はブレアが検証した "Huck Finn and  
Tom Sawyer among the Indians" とドッジの *Our Wild Indians* との関係を  
丹念に調べ直し、その影響の大きさに注目した。そして「トウェインは自分が  
インディアンについて書きたいようなことが、ことごとくそこに書かれてしまっ  
ていたので、自分の『インディアンもの』を書けなくなった、あるいは途中で  
放棄せざるをえなくなった、と私はほとんど信じかけている」(108) といっ  
て、未完のわけを解き明かしている。トウェインは、ドッジの本に相当数の書き  
込みをしていたようだから (八木 108, Blair 85)、ドッジにはかなり入れ込んで  
いたのだろう。当代屈指のストーリー・テラーが、インディアンを語ることに



関しては自らドッジに軍配をあげ、看板をおろしたということはありません。しかしこれではそれこそ作家が完全に作品を投げ出し、後はドッジに任せただけだからインディアンについてはドッジを読めということになるが、もしそうだとしたらこれ以上の議論は全くの徒労ということになる。いずれにしても真相は藪のなかなので、この解釈はとりあえず置いておくことにして、先を書けなくなった（書けなかった）わけをもう少し考えてみよう。

読者の判断を停滞させる中途半端な結末がマーク・トウェインのやむを得ぬ選択だったのか、あるいはもしかしたら「やむを得ぬ選択」そのものがトウェイン流のしたたかな戦略的問題提起だったと考えるとどうなるだろう。インディアンは白人を無残にも殺した。これは間違いない。しかしこの呼び水となったのはハックのいらぬ嘘であった。現れた男は、インディアンを畜生同然と見る屈強な白人。この男にインディアンは徐々に追いつめられる。これだけ物語の事実を並べて見えてくるものは……。なぜインディアンは野蛮としかいいようのない行為に及んだのか。非は、平気で人を殺す極悪非道のインディアンにあるのか、それとも人の土地に土足で踏み込む無神経な白人にあるのか。このように疑問を単純化してみても、答は単純化するどころか矛盾迷宮のなかに深くはまり込んでいく気さえしてくる。恐らくこれが80年代のトウェインの偽らざる心境だったのでないか、というのが筆者の考えである。だから答は読者にも、トウェイン自身にも見えるようで見えないのである。*Huck Finn* には、7年の中断と再開の繰り返しを経てハックの地獄行きの決断にたどり着き、ジム救出、ひいては黒人奴隷救出という物語の結末が用意された（拙論「自由な人間を自由にする—*Adventures of Huckleberry Finn* における『だまし』の構図」『西南学院大学英語英文学論集』第35巻第1・2・3合併号、1996参照）。しかし、"Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians" に結末が用意されることはついぞなかった。トウェインは、インディアンと白人のどっちつかずの視点の揺らぎのなかで、焦点を失い、あるいはぼかし、ぶれた視線を読者に送って判断を鈍らせながらも、インディアン問題に立ち入りその所在を明らかにすることを強要する。

フォレスト・G・ロビンソン (Forrest G. Robinson) はその著 *Having It*

*Both Ways* (1993) において、優れた文学作品にはふたつの視点ないし考え方が同時に存在すると提言した。"have it both ways" とは文字通りふたつを同時に持つこと、俗に二股をかけるということだ。ふたつにひとつを取捨選択するのではなく、ふたつの共存を許すという考え方だ。一方に公共の理想があれば、他方にその理想を裏切る現実がある。その状況のなかで人間はどう生きるか。これがロビンソンの最大関心事だ。理想をとるのか、現実を取るのか、ふたつにひとつではなく、両方の間でどちらをも否定することなく生きる。様々な「すり抜け、フェイント、はぐらかし、折り合い」を重ねながら、ときには知っていることを隠し、隠されていることを知りながら、現実を生き、また理想に生きるということだ (2)。だからそれは、社会的政治的理想とその理想からの逸脱との摩擦のなかで起こる「不安定な妥協」を余儀なくされる。この矛盾、葛藤をロビンソンは「自己破壊的傾向」と呼んだ (3)。かつて彼は "bad faith" という切り口で *Tom Sawyer* を読み解いたが (*In Bad Faith*, 1986)、ほぼこれと同じものと考えてよいだろう。ジェイムズ・H・ジャスタス (James H. Justus) のいう、人種問題を扱う際キャノン作家が持つ「物語の解決を揺るがすほどの不安」(207) も結局ロビンソンのいう「自己破壊的傾向」に基づいているといえるだろう。

1880年代のマーク・トウェインが60年代70年代と明らかに違うのは、インディアンと白人のふたつの視点を持ったということだ。インディアンの言い分はわかる。しかしそれをそのまま認めれば、白人としての自分を否定することにつながり、アメリカという居場所を失う。この否定と肯定の葛藤のなかで自己破壊的衝動に駆られながらも、トウェインは、ときにはインディアンの視点に立ち、またときには白人の視点を振りかざし、その揺るぎのなかに身を任せた。"Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians" は彼のその生き方の証として位置づけることができるのではないだろうか。そういう意味で、未完が彼の唯一の解決策であり、結論であったといえるだろう。ふたつにひとつという、一方を切り捨てるような結末は書けなかったし、書けなかったことである。

この議論の確証のひとつとして "The Dervish and the Offensive Stranger"

(1902執筆)を紹介しよう。まずダム建設に関してふたつの考え方が紹介される。砂漠の大平原がある。近くの川にダムを建設しそこに水を引いて緑の平原にする。そこに食うや食わずの人々を入植させ土地を開墾させればみな豊かになり幸福になる。しかしインディアンにしてみれば、ダム建設はインディアンが住む土地から水を奪い、土地を枯らし、その結果飢餓をもたらす。トウェインにしてみれば、川をせき止める(dam)ことは川を地獄に追いやる(damn)ことにもなるのであろう(588-9)。コロンブスの新世界発見はどうか。ヨーロッパの貧しき者、土地を持たぬ者に広大な土地を用意し幸福にした。その際何が起こったか。「その土地のもともとの所有者を動物のように狩り出し、蹂躪し、略奪し、家から追い出してひもじい思いをさせ、あげくの果てにはひとり残らず皆殺しだ」(589)。世の中には良い衝動と悪い衝動、善意と悪意しかなく、善行、悪行はその結果でしかない、と対話者のひとりがいう。善意から発したものでも良い結果が生まれもすれば悪い結果が生まれもする。これが先ほどのダムとコロンブスの例だ。善かれと思ってしたことが、視点を変えれば善行にも悪行にもなるということだ。善かれと思ってしたこと。ダム建設も、新世界進出も。そして文明は人間を着実に進歩させたはずだった。しかし、その文明が世界に悲劇をもたらすという現実の不合理。この不合理にマーク・トウェインの足場は揺らぎ、絶望の淵に立たされた。ハリスがいうように、トウェインは、インディアンに対する白人の過ちを認めそれを明らかにして正していくのか、あるいは獲得した土地も富も保持したまま白人の行為を正当化し、インディアンを自分の土地を持つ価値のない、従って土地を取り上げられても当然の人種として情け容赦なく切り捨てるのか、このふたつの間でどっちつかずのジレンマに陥り(504)、結局その先は沈黙を押し通すしかなかったのかもしれない。しかしこのまま沈黙を続けていては白人の不正行為を暗黙のうちに了解したことになるというハリスの指摘は正しい(505)。また善意からとはいえ不正が見えてもトウェインはもはやそれ以上関わらなかったというハンソンの指摘も正しい(12)。しかしそのことはトウェイン自身百も承知だった。この掌編でトウェインはふたつの視点を提示した。どちらの言い分ももっともなことに思えるし、トウェインはそれ以上立ち入らず二者択一的な解説は一切しない。

だからトウェインは両者の言い分を認めている、善の名において悪を行ったことを了解しているのとられても致し方ないのかもしれない。しかしながら、ここで重要なことは、悪意から生まれた悪行は論外として、(白人の)善意から生まれた(白人のための)善行でも、視点を変えれば悪行に早変わりすることをトウェインが読者に(願わくは白人読者に)知らしめたという事実だ。「欲しいものがあったら取るだけだ」といってはばからないアングロサクソンの驕れる政治的無意識という透かしの仕掛けを露呈させたといってもよい。

このことは *Following the Equator* (1897) を読めばなお一層はっきりする。"The Dervish and the Offensive Stranger" の5年前に出版されたものだ。白人の善意により南洋の先住民に何が起こったか見てみよう。1895年、マーク・トウェインはハワイ、オーストララシアを経由してインド、南アフリカに至る長旅に出た。問題の場所はオーストラリア南東のタスマニアだ。その先住民の絶滅の経緯について書き記している。彼らは白人の入植に伴い先祖の土地を追われ、近隣の島々に移された。先住民の安全のため、彼らの生活がこれ以上脅かされないようにするため、という白人の「善意」が彼らを動かした。

白人は常によかれと思って、海から人間という魚を出してやる。そして体を乾かし暖めて、鶏小屋で幸福に快適に過ごせるようにしてやろうという。しかし、頼りの白人がどんなに心優しくとも、未開人の扱いには適任でないことを自ら証明するだけだ。立場を逆にして、自分の方が善意の未開人によって家や教会から閉め出され、衣服も本も上等の食べ物もなく、砂と岩と雪と氷とみぞれと嵐と灼熱の太陽しかない荒野に連れて行かれたら、雨露をしのぐ屋根もなければベッドもなく、家族の裸の体をおおうものなどあるはずもなく、食べるものといったら蛇と地虫と屍肉しかない、そのような忌まわしい場所に移動させられたらどんな思いがするか想像もできないのだ。このようなことになったら白人にとっては地獄であろう。そしてもしその白人に分別というものがあれば、白人の文明そのものが未開人にとって地獄であることくらいわかりそうなものだ。しかしそれがわからない。わかったためしがない。それがわからないから、これ以上の善意はないと思ひ込んで、

想像を絶する文明地獄に哀れ先住民を閉じ込めるといふ罪を犯し、その責め苦で彼らが衰弱するのを眺めて、ちょっと心配そうな、悲しそうな目で見つめては、いったい何がどうだということのかしらねえ、などということがいえるのだ。(267)

せっかく快適な場所に移してやったのにどうして衰弱し死亡に至るのか。思案の末、理論的に考え出された白人の結論はこうだ。「神の怒りに触れたのだ。神を恐れぬ罪深い人間に対する天のお告げだ」(267)。これで一件落着と考えて能天気に一安心する白人に対するトウェインの小気味よい皮肉は、独善的な侵略者の厚顔無恥を暴き出す。「人間は唯一恥を知る（あるいは恥を知る必要がある）動物である」(256)とは、このタスマニアの章の冒頭に掲げられた「間抜けのウィルソンの新カレンダー」の箴言である。場所がアメリカではなく、対象がアメリカ・インディアンでないことを差し引くにしても、滅びゆく弱小民族に対するマーク・トウェインの眼は限りなく優しい。それはすでに60年代、70年代の露骨な偏見を経て、80年代の視点の定まらぬ斜視の状態を脱却し、19世紀も終りに近づく頃、徐々にその視線は注視点に向かい始めた。そしてその視線の先にはアメリカ・インディアンがいた。

### 3. インディアンのなかのマーク・トウェイン

1907年、マーク・トウェインは、亡くなる3年前に"Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven"という天国訪問記をものした。老骨にむち打ち世界を飛び回った旅行作家トウェインは、いわば身代りのストームフィールド船長を天国に遣わした。マーク・トウェイン最後の旅路だ。30年の船旅の末、ようやく天国らしき所に辿り着くが、自分の所属すべき場所がなかなか見つからない。天国が出身地ごとに区分けされているうえに、その出身地の地球が天国から見たら芥子粒のような存在でしかないからだ。地球は天国では「いぼ」と呼ばれている。その「いぼ」のなかの小さなアメリカ、さらに小さなカリフォ

ルニアに行き着き、天国の居場所で一息つく。そこで最初に会った地球人は顔見知りのインディアンであった。

トゥーレアリ郡で知合いだったパイユート・インジャンだった。ものすごくいいやつだった。あいつの葬式に参列したのを思い出した。といってもあいつを火葬にし、その灰を他のインジャンたちが顔に塗りたくり、汚い顔をして山猫みたいに吠え立てるといった葬式だった。あいつは私を見てものすごく喜んだ。私もあいつに会って同じように喜び、やっとのことで天国の自分の居場所に辿り着いたと感じたことはいうまでもない。(573)

30年かけてようやく辿り着いた天国で顔見知りのインディアンを見て小躍りし、自分の所属すべき場所はここだと確認する。よくよくあたりを見れば、インディアンだらけではないか。「白い天使」はほとんど見かけない。ひとりの「白い天使」を見かけるたびに一億もの「銅色の天使」に出くわす(591)。天国で知り合いになったサンディという72歳の老人にそのわけを訊いて見ると(トウェインはこの年、つまり1907年、72歳)、天国のアメリカ・コーナーではどこに行っても結果は同じ、「天使はうじゃうじゃいるが、ひとりとして白い天使を見かけたことはない」と教えてくれた。「アメリカは、白人が足を踏み入れる前は、10億年以上の間インジャンとかアステカといったようなひとたちが占有していたんだ。コロンブスのアメリカ発見から最初の300年間は、全部合わせたってせいぜい1回の講演に集まるくらいの白人しかいなかったんだからね」(591)。サンディじいさんによると、天国の他の地区から見学に来た学者たちは、アメリカを説明するのに5行程度ですませてしまうらしい。「彼らは、この荒野には数百兆もの赤い天使が点々と住んでいる、そのなかには時々奇妙な皮膚の色をした病気にかかった天使が混じっていることがあるというんだ。いいかい、我々白人と時折見かけるニガーは、癩病か何かにかかって、そう、何とも恥知らずな罪を犯して、皮膚を完全に漂白されてしまったインジャン、あるいは黒くされてしまったインジャンだと思っているんだよ」(592)。

これが、ストームフィールドが天国で見た郷里アメリカだ。しかしサンディじいさんの説明を聞いてもこれといって幻滅を覚えるわけではなく、むしろそこに住むことを喜んでいるようだ。「亡くなった知り合いがいっぱいいるし、彼らを捜し出して友のことやら昔のことやら、あれこれおしゃべりをして、住んでみて天国はどうなのか訊いてみようと思っていたんですよ。家内はカリフォルニア地域に腰を落ちつけたいんじゃないかな。天国に先に行った人々はほとんどみなそこにいるだろうし、知っているひとたちと一緒にいるのが好きなひとだからね」(592-3)。これを聞いたサンディじいさんは、カリフォルニア地方はやめた方がいい、「間抜けで泥色をした浅ましい天使がわんさかいるうえに、一番近い白人の隣人でも百万マイルも離れているんだから」(593)というが、そのサンディでさえ、白人が多くいるヨーロッパ地域に行く気はさらさらでない。同じ白人でもドイツ人もイタリア人もフランス人も話が通じないし、イギリス人にしても言葉の通じる相手はめったにいないからだという。それで結局インディアンのはびこるアメリカにいるというわけだ。

マックルウェル・ガイズマー (Maxwell Geismar) は、西部インディアンに対する初期の根深い偏見という、トウェインに取り憑いた悪魔は、"Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven" をもって祓われたといった (285)。若い頃のインディアンへの偏見から数十年の長き年月を経て、トウェインはアメリカ白人文明への幻滅を表明するとともに、北アメリカ全土をインディアンに返還したともいった (287)。ストームフィールドが天国に辿り着き自分の居場所を探し出すのに 30 年かかったように、トウェインはそれ以上の年月の間、この世の偏見の悪魔に取り憑かれ、自ら政治的無意識という名の病に犯されて、暗黙のうちに白人の悪行を見て見ぬ振りをして来た。そしてストームフィールド以上の年月をかけて、白人であることの矜持と恍惚を乗り越え、葛藤と不安と恐怖の果てに偏見の悪魔を払い除ける唯一の場を探し出した。ガイズマー同様、マクナットも、"Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven" をもってマーク・トウェインは土地を追われたインディアンをアメリカの後継者として描いたことを認めた (240)。マクナットによれば、トウェインの天国は無限の時間と空間を持ち、人種的・文化的関係などは遙か彼方の

遠景でしかない (240)。ストームフィールド船長が知り合いのインディアンに会い安堵するのも無理はないのである。かつてメルヴィルは、インディアンをバッファロー並みに見るパークマンに楯突いて、「たとえ絞首台からぶらさがっていても、神の姿がそこに認められれば、敬意をもって接しよう」といった。そのパークマンを評価し同じ立場からインディアンを見ていたトウェインは、およそ 50 年を経て今度はメルヴィルの立場に立った。そして「不運は過ちではないし、幸運は価値のあるものではない。未開人は生まれながらにして未開人であり、文明人はその文明を受け継いだに過ぎず、それ以上のものではない」というメルヴィルの言葉は、マーク・トウェインの言葉になった。

それにしても土地返還の場所が天国であることを考えると、トウェインのインディアン復権の仕掛けに安堵しながらも、その安堵を半ばに押さえる現実のインディアン問題の厳しさに思いは至る。土地を奪われ、惨殺されたインディアンの魂が癒されぬまま土地の悪魔となり復讐の亡霊となって、恨めしい白人にのしかかるといったのはロレンスであったが、彼はインディアンと白人との和解にはかなり否定的であった。インディアンの恨みが強いからだが、しかし白人の罪滅ぼしがあれば、人間としての和解は不可能でも、魂の和解は可能かもしれないともいっている。(Studies in Classic American Literature 43-4)。「罪滅ぼし。かくして和合 (oneing)」。しかしロレンスには白人が罪滅ぼしをするとは思えなかった。許すことのできぬ白人への恨みが募り復讐の鬼と化して土地をさまようインディアンの亡霊に恐れおののきながらも、イギリスという白人階級社会を捨て、インディアンやアステカに並々ならぬ思いを抱いて大洋を渡って来たことを思えば、羨望と絶望のせめぎ合いのなかで身を忍ぶしかなかったのだろう。

意識的にせよ、無意識的にせよ、間接的にインディアン迫害に関わったトウェインに罪滅ぼしの表明はない。だからロレンスにいわせれば、和解も和合もない。しかしトウェインはフィクションの世界で白人の醜い迫害を描き、その文明を揶揄した。ロレンスがイギリスを捨てたように、少なくとも 20 世紀のトウェインはアメリカを捨てた。なぜなら白人が闊歩する帝国主義アメリカに絶望したからである。アメリカはインディアンのもものではなかったか。しかし

くら自分ひとりがアメリカを捨てインディアンに返すといっても、依然としてアメリカは白人のものだ。かくなるうへは、死んだインディアンのおびただし数にものをいわせて、インディアンにアメリカを占有させよう。これがマーク・トウェインの罪滅ぼしだ。この世で無理なら、死のファンタジーの世界で白人の悪霊を追い払い、インディアンの精霊を跋扈させる。「アメリカを見つけたことは素晴らしい。しかし見落としていたら、もっと素晴らしい」(300)とは *The Tragedy of Pudd'nhead Wilson* 中の「間抜けのウィルソンのカレンダー」の箴言である。これは物語上黒人奴隷問題に関してウィルソンが記したものであるが、インディアン問題にもそのまま当てはまる。コロンブスがアメリカに渡って何が起こったか。すでに "The Dervish and the Offensive Stranger" のなかで触れられていたが、不条理にも善意の文明が地獄をもたらすこともあるのである。

1907年、齢70を越え、もはや大西洋を渡ることはあるまいと心に決めていたのに、マーク・トウェインは子供のように喜び勇んでイギリス行きの船に乗り込んだ。オックスフォード大学から名誉博士号が授与されるからだ。すでにイェール大学やミズーリ大学から学位をもらってはいたが、高等教育を受けていないトウェインにしてみれば、オックスフォードの学位は別格だったのかもしれない。70を越したおじいさんが何を今更、という向きもあるが、それはさておき、彼の喜びようを見てみよう。

私は新しく学位がもらえるというのなら、インジャンが新しく頭の皮を剥いだときと同じように、大人気なく大喜びしよう。インジャンだったら喜びを隠すなどということはしない。私だって喜びを隠すなどという面倒はまっぴらご免こうむる。( *The Autobiography of Mark Twain* 348)

トム・ソーヤーは仲間ふたりとインディアンごっこに興じたことがあった。裸になってインディアンのまねをし、白人家族を襲っては頭の皮を剥ぎ虐殺する子供たちがいた。そこには、子供の遊びとはいえ、インディアンの残虐性を浮

き彫りにしようとするマーク・トウェインの意図が見え隠れした。しかし71歳になったトウェインに、インディアンを野蛮人として見下し、その蛮行を非難して、オックスフォードから学位をもらうほどの文明人である自分の優秀さをことさら際立たせようなどという意図がないことはいまでもない。無邪気にインディアンになりきり、インディアンとともに喜ぶトウェインがここにいる。自分がインディアンと同じであることを隠す必要がどこにある。ロレンスはインディアンとひとつになること (oneing) の不可能性を嘆いた。一方トウェインは、死という夢幻の世界で、天国の祓魔師となって罪を滅ぼし、偏見の悪魔を払い除け、白いアメリカを捨て赤いアメリカを然るべき我が居場所とした。

#### 引証文献

- Blair, Walter. The Annotation on "Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians" in *Mark Twain's Hannibal, Huck & Tom. The Mark Twain Papers*. Berkeley: U of California P, 1969. 81-91.
- Coulombe, Joseph L. *Mark Twain and the American West*. Columbia: U of Missouri P, 2003.
- Denton, Lynn W. "Mark Twain and the American Indian." *The Mark Twain Journal* 16.1 (1971): 1-2.
- Dodge, Richard Irving. *Our Wild Indians: Thirty-three Years' Personal Experience Among the Red Men of the Great West*. Hartford: A. D. Worthington. 1882.
- Fishkin, Shelley Fisher. *Lighting Out for the Territory*. Oxford: Oxford UP, 1996.
- Geismar, Maxwell. *Mark Twain: An American Prophet*. Boston: Houghton Mifflin, 1970.
- Hanson, Elizabeth I. "Mark Twain's Indians Reexamined." *The Mark Twain Journal* 20.4 (1981): 11-12.
- Harris, Helen L. "Mark Twain's Response to the Native American." *American Literature* 46.4 (1975): 495-505.
- Justus, James H. *Fetching the Old Southwest: Humorous Writing from Longstreet to Twain*. Columbia: U of Missouri P, 2004.
- Lawrence, D. H. *Phoenix*. New York: Viking P, 1936.
- \_\_\_\_\_. *Studies in Classic American Literature*. Final Version (1923). *The Works of D. H. Lawrence*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.

- Lorch, Fred W. "Mark Twain's Early Views on Western Indians." *The Twainian* 4.7 (1945): 1-2.
- McNutt, James C. "Mark Twain and the American Indian: Earthly Realism and Heavenly Idealism." *American Indian Quarterly* 4.3 (1978): 223-42.
- Melville, Herman. "Melville on Parkman's Indians." Document 102 in *The Indian and the White Man*. Ed. Wilcomb E. Washburn. New York: New York UP, 1964. 437-8.
- Newquist, David L. "Mark Twain among the Indians." *MidAmerica: The Yearbook of the Society for the Study of Midwestern Literature* 21 (1994): 59-72.
- Parkman, Francis. "Parkman on Cooper's Indians." Document 103 in *The Indian and the White Man*. Ed. Wilcomb E. Washburn. New York: New York UP, 1964. 439-41.
- Powell, J. W. and Ingalls, G. W. "From Warpath to Reservation." Document 89 in *The Indian and the White Man*. Ed. Wilcomb E. Washburn. New York: New York UP, 1964. 377-85.
- Powers, Ron. *Mark Twain: A Life*. New York: Free P, 2005.
- Robinson, Forrest G. *Having It Both Ways: Self-Subversion in Western Popular Classics*. Albuquerque: U of New Mexico P, 1993.
- Roosevelt, Theodore. "'These Foolish Sentimentalists . . .'" Document 34 in *The Indian and the White Man*. Ed. Wilcomb E. Washburn. New York: New York UP, 1964. 129-36.
- Trenton, Patricia and Houlihan, Patrick T. *Native Americans: Five Centuries of Changing Images*. New York: Harry N. Abrams, 1989.
- Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. Eds. Victor Fischer, Lin Salamo. *The Mark Twain Library*. Berkeley: U of California P, 2001.
- \_\_\_\_\_. *The Adventures of Tom Sawyer, Tom Sawyer Abroad, Tom Sawyer, Detective*. *The Works of Mark Twain*. Vol. 4. Berkeley: U of California P, 1980.
- \_\_\_\_\_. *The Autobiography of Mark Twain*. Ed. Charles Neider. New York: Harper & Row, 1959.
- \_\_\_\_\_. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*. *The Oxford Mark Twain*. Vol. 11. Oxford: Oxford UP, 1996.
- \_\_\_\_\_. "The Dervish and the Offensive Stranger" in *The Complete Essays of Mark Twain*. Ed. Charles Neider. Garden City: Doubleday, 1963. 587-90.
- \_\_\_\_\_. "Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven" in *The Complete Short Stories of Mark Twain*. Ed. Charles Neider. Garden City, NY: Doubleday, 1957. 563-97.
- \_\_\_\_\_. *Following the Equator and Anti-imperialist Essays*. *The Oxford Mark Twain*. Vol. 20. Oxford: Oxford UP, 1996.
- \_\_\_\_\_. "Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians" in *Huck Finn and Tom Sawyer among the Indians and Other Unfinished Stories*. *The Mark Twain Library*. Berkeley: U of California P, 1989. 34-81.

- \_\_\_\_\_. *The Innocents Abroad*. Vol. 1. *The Writings of Mark Twain*. Vol. 2. Author's National Edition. New York: Harper & Brothers, 1897.
- \_\_\_\_\_. *Life on the Mississippi*. *The Oxford Mark Twain*. Vol. 9. Oxford: Oxford UP, 1996.
- \_\_\_\_\_. *Mark Twain's Autobiography*. Vol. 1. Ed. Albert Bigelow Paine. New York: Harper & Brothers, 1924.
- \_\_\_\_\_. *Mark Twain's Letters*. Vol. 1. *The Mark Twain Papers*. Berkeley: U of California P, 1988.
- \_\_\_\_\_. "The Noble Red Man." *Galaxy*. Vol. 10 (1970): 426-29.
- \_\_\_\_\_. "Plymouth Rock and the Pilgrims" in *Plymouth Rock and the Pilgrims and Other Salutary Platform Opinions*. Ed. Charles Neider. New York: Harper & Row, 1984. 94-98.
- \_\_\_\_\_. *Roughing It*. *The Works of Mark Twain*. Vol. 2. Berkeley: U of California P, 1993.
- \_\_\_\_\_. *The Tragedy of Pudd'nhead Wilson and the Comedy Those Extraordinary Twins*. *The Oxford Mark Twain*. Vol. 16. Oxford: Oxford UP, 1996.
- Williams III., George J. *Mark Twain: His Life in Virginia City, Nevada*. Dayton, Nev.: Tree By The River P, 1986.
- \_\_\_\_\_. *On the Road with Mark Twain in California and Nevada*. Dayton, Nev.: Tree By The River P, 1993.
- 八木敏雄. 「なぜマーク・トウェインはインディアンがかけないか」. 『ユリイカ』 7 (1996) : 100-9.